

現代青少年の生き方をめぐって

——自殺死についての考察——

一

最近自殺の問題がクローズアップされてきた。とくに少年の自殺の問題はいじめなどの問題と共に世間の注目を集めている。なぜ子供たちが敢えて死を急ぐのであろうか。兎角このような子供たちに対して世間では特殊な子のように考えているむきもあるが、果してどうなのであろうか。斯かる立場を究明するために心理学や社会学、教育学、医学などの諸学の上に立って、学者、教育者、医師、補導関係者に至るまで幅広く真剣に説明せられようとしている。しかるにかかわらず子供たちの自殺は「動機なき自殺」と言われている如くに、この問題については未だ真意を得られていない現状にある。もちろん、この分野の研究は総合的視野の上に立って考察せられるべきは当然な事ではある、終局的には「いのち」の問題であり、「死者に口なし」のたとえの如く、宗教的見知よ

和 田 謙 寿

りの考察も大切な事と言わざるを得ない。元来、宗教なるものは身をもった実践的な活動が要求せられるので、理論的には抽象的な立場に陥入り易く、実際には多くの難関を残している。仏教はもとも自殺に対しては否定的な立場をとっているが、仏僧の中には自殺防止に献身的な布教を行っている人たちも少なくない。しかるに自殺防衛の面で判然とした成果が現わされていないのは、宗教的ボランティア活動の、地味な存在によるものなのであろう。詫摩武俊氏はわが国の自殺事情について、⁽¹⁾「わが国にはもともと至誠や名誉を死によって表現する傾向が殉死などの例で示される如く存在していた事、それに宗教がとくに自殺の防止に役立っていないこと。社会的ストレスが内向化しやすいこと」などがあって世界でも有数の自殺国になっていると警鐘せられている。更に自殺者と他殺者との割合をあげることによって、一つの国の社会的状況とか国民性を知る手がかりとなることを掲げ、わが国

の自殺は他殺の六倍から八倍で、これは世界でも珍らしい数字であると指摘されている。自殺率には⁽²⁾一般的に性差があり、多くの国では女性に比して男性の占める位置が高いといわれている。自殺のもっとも多い国はハンガリーで、人口十万比三六・九人、続いてデンマークの二三・八人、フィスランド一三・五人、チェコスロバキア二二・四人、オーストリア二二・一人、スウェーデン、西ドイツ二〇・八人、日本一七・三人の順で、相対的にわが国は多い方に属するといわれている。青少年の場合警察庁の調査によると、十九歳未満の少年が全国で昭和五二年度に七八四人(男五二九人・女二五五人)、昭和五三年度に八六六人(男五七七人・女二八九人)、昭和五四年度九一九人(男六四四人・女二七五人)、昭和五五年度六七八人(男四五一人・女二二七人)、昭和五六年度六二〇人(男四四二人・女一七八人)、昭和五七年度五九九人(男四二四人・女一七五人)、昭和五八年度六五七人(男四五二人・女二〇五人)、昭和五九年度五七二人(男三九四人・女一七八人)、昭和六〇年度五五七人(男三八八人・女一六九人)、昭和五二一六〇年における自殺の最も多い年は五四年度の九一九人で、最も少なかったのは六〇年度の五五七人である。自殺者の男女別の比率は、男子は平均六九%、女子は三〇%の割合となっている。

少年の自殺を、小・中・高・大の別で見ると、

昭和五二年度 小学生一三人・中学生一〇三人・高校生二

四二人・大学生六三人

昭和五三年度 小学生九人・中学生一〇〇人・高校生二七

一人・大学生六九人

昭和五四年度 小学生一五人・中学生一一八人・高校生三

一九人・大学生六四人

昭和五五年度 小学生一二人・中学生七三人・高校生二〇

二人・大学生五九人

昭和五六年度 小学生一三人・中学生八八人・高校生一九

七人・大学生五〇人

昭和五七年度 小学生一二人・中学生八一人・高校生一九

九人・大学生三四人

昭和五八年度 小学生一〇人・中学生一〇二人・高校生一

九二人・大学生四六人

昭和五九年度 小学生一〇人・中学生七九人・高校生一五

八人・大学生三三人

昭和六〇年度 小学生一二人・中学生九二人・高校生一五

五人・大学生三七人

1 少年のうち高校生の自殺は圧倒的に目立つ。少年の自殺を年齢別で見ると一九歳が最も多く、約二九%、一八歳が約二二%と続き、この両者で全体の約五〇%を占めている。

2 自殺を原因動機別で見ると、学校問題が最も多く、次いで、男女問題・家庭問題の順となっている。学校問題のうち

最も多いものが「学業不振」、次いで、入試に関連した事項となっている。

—警察庁少年課—

「世界保健機関(WHO)の一九七三年の発表によると、世界中で少なくとも毎日一〇〇〇〇人が自殺し、未遂は一人にもものぼると考えられているから、現在では更に多く人たちが関連しているものと思われる。

自殺未遂は日本では自殺者の三倍とみているが、欧米では一〇倍の立場で見られている。国連人口の統計による記録である。

一九五六年 日本女性の自殺率世界第一位

一九五七年 日本の自殺率世界第一位

一九六一年 日本の少年自殺率世界第一位

一九六二年 日本の自殺率世界第三位

日本の児童事故死世界第一位

一九六八年 日本の老人の自殺率世界第一位

昭和四六年から七年にかけて自殺事件が頻発し、四七年初頭には十数年ぶりに新聞の社説にあらわれた。最近ではいじめによる少年の自殺、岡田有希子の自殺、エホバの花嫁七人の集団焼身自殺は世間の注目を集めた事件であった。とくに、中学生や高校生を中心とした子供の自殺に対しては大きな社会問題となっている。

二

強制収容所⁽³⁾では一般に抑うつ反応や不安神経症、ヒステリー反応などの神経症的反応は発生しないし、自殺の問題も殆んどみられないといわれている。国をあげて戦争や社会情勢の緊迫に対処し、互に個人を結び合い強い連帯感を要求されているとき、つまり戦時中には自殺率は低下すると考えられている。また社会が比較的⁽⁴⁾に表面的には平和を装っているが、個人間の対立が浮彫されるような時代には自殺は増加するといわれている。このような考え方は大人の自殺の場合のみでなく、青少年の場合にも普及するものと考えられる。

社会生活や経済活動の激しい時にも自殺が多く、また、青年期⁽⁵⁾に余りに高い理想を描くことにより現実に思う事がなにも成し得ず、激しい悩みや自己嫌悪に陥入り、その結果は自殺に傾くこともある。反対に、異常な低い自己水準に陥入り劣等感に浸った場合も同様な意味の主観的窮地に立って危険な状態となる場合がある。青年期は自我に関して非常に関心の昂まる時期であり、その反動⁽⁶⁾としての劣等感が著しく強くなる。幼児よりの成育歴に、家庭・社会の愛情の欠如等、マインナスの環境の加味された場合には、とくに劣等感的なコンプレックスとしての症状があらわれる場合がある。劣等感の発散を上手に利用せしむれば青少年を奮起さすべき原動力と

なるし、誤ればとりかえしのつかぬ不幸の原泉ともなり重大な事件を引起す引き金ともなり得るのである。「心の病」に⁽⁷⁾関連すると思われる心理的特徴として 1 コントロールの効かぬ心の脆さ、2 不和雷同の傾向、3 両親への固執、または不信、4 幼児的退行、5 自傷傾向、等が挙げられるが、かかる問題の所在は、1 家庭の両親をはじめとした因果関係、2 それをとりまくマスコミや周囲の地域環境、3 学校の持つ友人間の不信、知識偏重等にもなる競争の激化などがある。自殺をする人たちの性格はそれぞれの共通した特徴を持っているといわれているが、子供の場合は、大人の如く自身を追いつめながら行き詰まって死を求めてゆくものではなく、緊張による神経の疲労と挫折感が重なり、それに耐え難きときに暴発するものであると考えられている。つまり彼等の持つ人格的特徴としては、1 両親がそろっている中流家庭で、勉強も割に上位を占めている子供であり、2 教師や近隣の大人たちから見ても、礼儀の正しい真面目な子供であり、3 ときには明るい活発な良い子の如く観察されている場合が多かった。しかし、他面⁽⁸⁾においては内向的にして孤獨的な面もあり、挫折感に弱いという特性を有している。幼児より甘やかされて育ち、事に当りてブレイキをかけることの出来ぬ子供たちは、おのずと挫折感を持つであろうし、内面的で孤独感の強い少年たちの場合も、しぜん内罰的な傾向に走る可能性

がある。これらは外見、如何にも従順的な態度をとるかのように見えたり、または、几帳面的な性格の如く表現せられる場合もある。もともと、几帳面は潔癖性と一致するところがあるも、度を越すとそれが高じて柔軟性を欠き、物事に対してこだわり易い性格となる。⁽⁹⁾

孤独は精神的不安定や絶望感を生ぜしむる事もある。また、親や教師、友人などに対して信頼感を消失せしむる結果になることもあり、とどのつまりは無気力、無表情に至る場合もある。

自殺に向い易い性格⁽¹⁰⁾として、「極端に内向的にかたより、孤独で、内気で、無口で、不安、絶望感的な心情を持ち、潔癖で執着性の強いところがある。いわゆる、まじめ人間で、神経過敏であり、責任感が強く、趣味がないのも特徴である。情緒不安定的なところもあり、気分が変動しやすく、依存的にして且つ、逃避的で、社会性に乏しく、衝動的であり、精神的な弱さがある」のが一般的である。

三

教師からはおとなしい良い生徒として賞められ、家庭でも何一つ不自由なくして過ごしている子供が、なぜこのように自分からこの世を去ってゆくのであろうか。もちろん、いじめや家庭内暴力など学校や家庭に不満をいだいて散ってゆく

少年たちの死の抗議をわからぬではないが、それにしても、あっさりこの世を去ってゆく仕草には納得する事が出来ない。どうしてももっともっと頑張らなかつたのであろうか。気になる事ばかりである。普通自殺の原因を、1 心理的要因⁽¹¹⁾、2 社会的要因、3 生物的要因 の三つに分類されているが、とにかくそれに加えて、家庭要因・学校要因等を加味している場合もある。心理的要因は自殺の性格を心理学的立場より説明せんとしたものであり、社会的要因は、自殺の立場を社会学的見地より究明したものである。これに対して生物的要因とは、遺伝、等を主軸に、精神病・異常性格などを生物学的に研究せんとしたものである。もちろん、これら自殺に関する問題は単的に存在するものではなく、互に相連関して考察されるところのものであろうが、自殺の研究は、対象研究となるべき相手があの世の人であり、とくに、未遂者を研究するにしても、子供の場合には大人の場合と異なり至難の業といわざるを得ない。

わが国には他国⁽¹²⁾に比して自殺を醸し出すと思われる背景とその要因が多い。その第一は、都市部における核家族による子供の出生率の減少より起る、過保護の問題である。過保護の現象は甘やかしによるしつけの根源を惹起し、子供の生活に種々なるマイナス面を構成する。第二のいじめの問題や受験システムによって生ずる落伍の問題は、結果的に自殺の原

因に關与することにもなる。元來、子供たちの自殺の原因には遺伝要因と共に環境的要因も見逃すことは出来ないが、文化国家、經濟大国としてのわが国の場合、後者の影響は宿命と言おうか、受けざるを得ない環境にある。欲しいものは何でも買える。節約的な觀念は薄れ、精神的な生活は物質文明のもとに萎縮している現状である。世間では修身教育の徹底や歴史教育の充実を主張する世論も上昇し、青少年の無氣力を憂うる人たちも増えている。テレビやパソコンなどの普及によって個人的な室内での遊技が行われる一方、受験システム一般化は孤独な生活を強いられ、青少年の人生觀もその場限りの輕卒に流れ、昔日の如き友人關係も変化して眞の親友を得る事は大変むずかしいものとなつてしまつた。「欲しいがればなんでも買ってもらえる」という社会風潮は物を粗末にするばかりでなく物事に対して「耐える」とか、「ねばりぬく」という試みより遠ざかつてしまつた感がある。一般的に小学生や中学下級生⁽¹³⁾の如き依存性の高い子供たちの場合には、家庭問題や学校のクラス内の身辺的な問題が多く、親や教師から強く叱責されたりすると衝動的な心の変動により死を選んだりすることがある。つまり、小学生たちの特性として、「叱られて」とか、「欲しいものを買ってくれないから」「学校に行くのはいやだ」等と環境的な立場が強くなる。また、中学校の上級生から高校生級になると、受験問題、進路問題、

異性問題等と将来に向つての傾向が取沙汰されるようになってくるのが特色である。學歷によつて将来が決定されるという日本社会の趨勢は現在でも尚力強く残されてゐる故、子供たちにとっては受験戦争こそ死活問題として考えられるのであろう。勉学の悩みは女性に比して男性の場合がかなり高い。とくに中学生の頃に成績の割に良い者が、途中で成績の低下を気にして自殺する者が多いという。一般の生徒たちが多少の心配事や苦しみがあつてもどうにか無事に耐え、日々を過ごしていられるのは、たとえ心理的な緊張が訪ずれたにせよ適度に程よく解消され、常に平衡状態を保持しているからである。

若しも苦悩の状態が長期間続き、緊張状況が鬱積して解決し得ぬ場合には心身の疲労は増大して重大な事態が出現する。物事に耐える訓練の少ない子供たちの場合には、それが大きな荷物になり自殺へと追い込まれる。子供の自殺とその家庭環境とを考えた場合、幼児期に親を失つたり離別したりした家庭に多い。とくに母親との離別は大きな影響を与えるといわれ、年齢的にも若い頃の離別が大きな問題を引起すといわれている。例え両親が健在であつても家庭不和、つまり、両親や親子間の争いが絶えないような家庭では危険の度合を増す事になる。親の無理解・親の過剰期待など、ちょっとした事で意外な発展をする。親の自殺も非常に大きな影響を持つ。

また遺傳的にもその負因は大きく影響するところが多い。自殺者⁽¹⁴⁾についてその血縁者を調査すると周囲に自殺者の意外に多いことが報告されている。この場合とくに父母に精神病的素因の多い事が注目される。昔から躁うつ病に遺傳傾向の強い事は知られていたが、躁うつ病の生物学的研究の進歩によつて、「背髄液中のセロトニン代謝物である5ヒドロキシインドール錯酸の低い人に自殺者が多い」という医的特徴が発見されて、身体的条件が解明されるようになった。もちろん⁽¹⁵⁾ここで注意すべきは自殺そのものが遺傳するといふのではなく、自殺を生じ易いところの精神病や異常性格の遺傳というものが考えられる。うつ病や精神分裂病⁽¹⁶⁾、神経症、異常性格者などの人たちは、正常の人に対して自殺傾向が一段高いといわれ、とくに、うつ病は自殺の主役をなすまでいわれている。しかし、うつ病即自殺と決めつけるのは早計であり、そこには自殺を實行すべき種々なる条件の存在が宿るからである。現代の科学では一卵性双生児の研究により両者が共に自殺するとは限らないと言う。うつ病傾向について學術的結果が出ていたので自殺者を必ずしも生物学的要因より結論を出す事を妥当としていないようである。自殺を個人的な理由としてだけであてはめて行くわけにはいかない。周囲の諸関係よりとらえて考えるべき必要がある。社会的要因として社会のひずみ⁽¹⁷⁾の問題があげられる。1情報過多、2不況にとも

なり就職難の問題、3 生命軽視の社会的風潮、4 物質中心的傾向と生き甲斐の喪失。これらの問題は自殺的立場を一層扇ぐ結果になると考えられている。

四

昭和六十一年の初頭、アイドル歌手岡田有希子の飛降り自殺は青少年の間にセンセーションを巻き起した。自殺は心理的に流行するというのが、彼女の自殺以後、数多くの同年齢の女性をはじめとして、若き男性(少数ではあるが)までもこの事件を導火線として、飛降り自殺という同じ手段を用いて自殺がなされたのであった。斯くまでも青少年の間に自殺が流行した陰には、マスコミの影響を忘れるわけにはいかない。その一番の主導はテレビであり、少年少女向の雑誌や週刊誌であることも間違えではない。テレビと子供とは切離せぬ関係⁽¹⁸⁾にあることは誰しも認めるところであるが、テレビの視聴時間は子供の場合、親の視聴時間と関連し、母親のテレビを見る家庭では自ずと子供も長く見ているといわれている。

親の見る週刊誌もしぜん、子供たちの目に入る事になるので斯かる問題が知らず知らずの間に事件を惹起させる兆しとなる場合が多い。とくにテレビの各社が視聴率を上げるために競走の一途をたどり、内容も白熱宣伝化して、少年に与える影響は益々大きく展開されることになる。自殺の影響はそ

れだけではない。自殺の場所も流行化する。三原山、熱海の錦ヶ浦、富士山の裾野、高島平団地等が自殺の名所として栄えるのも、死に場所を探す人たちにとってはしせんのみなり行きかも知れない。

大人の人たちの自殺の中には、うつ病や精神分裂病等の如き病的なものが原因となつて死に走る者もあるであろう。または、窮地に追い込まれて自ら死を選ぶ以外に方法はないとして死する者もあろう。更にまた、死を讃え、死にあこがれをもつてこの世を去る者もあるであろう。しかし、小中学生の如き場合の死の要因は、怒りと反抗を中心とした憤満やるせなき心境によるものが多いのではないかと思われる。親や教師、級友に反抗し、意識的、無意識的な報復の心をもつて自殺を断行するものであろう。「兄弟ゲンカをして一方的に叱られた時の悔しさと不満」、「教師より、クラスの友人より、無視されたときの不安や淋しさ」、「いじめに会った心痛と苦悩」、子供たちの「こんな事位いで死を選ばなくても良いのに」と思われる、あっけない死に方。しかし、子供たちには子供なりの大人には理解する事の出来ぬ深い苦悩・言い分があったのであろう。親に、教師に叱られたので死ぬ。これはただ単なる表面的な動機であつて、それ以前の長い間、秘められていたところの、不満や怒り、あせり、悩みが積み重つて事件に及んだのだと考えるのが妥当であろう。大人の自殺

の場合には子供たちと異なり、つくられたところの何物かが存在する場合がある。最近自殺をした子供の遺書には、「お母さん、お父さん、ごめんなさい」という短的なものが多く、これらの遺書だけでは自殺の真意を汲み取る事は非常に難しい。大人の場合には真の動機を隠す事によって体的に表現せられておきもある。自己の死を遺書を通して正当化し、価値あるものとして美化されているのである。このような場合もあるので、遺書とは言え、ことごとく信用するわけにはいかない。

一般的にみて、最近の青少年は遺書を書く者が少なくなつたといわれる。彼等の遺書を残す割合は、性別に見たとき、男性より女性に多く見受けられる。

自殺者自身、何故、死なねばならぬのか、わからぬ人もあるであろう。しかし、自殺者自身の心の中には、他人や本人にもわからない心のしこりがあり、意識的、無意識的の中に悩みおののいていることは確かである。精神分析者たちは斯かる自殺におけるコンプレックスについて種々の解明を試みている。彼等は個々の患者にふれて臨床的な立場をとり、連想試験・夢による判断等を通じてその行動を観察し、自殺未遂者を中心に分析を試みようとしたのである。自殺希望者が自殺を既遂し得るか否かはその時の運命によるかも知れぬが、一般的には既遂者は極めて周到な用意のもとに自殺行為を実

施しているのに対し、未遂者は不用意のもとに実施している点が多い。斯かる事項は精神分析的に考えた場合、真の欲求究明のためには非常に重要なことであると指摘している。

自殺を試みた事はないが、自殺することを考えたり死にたいと思つたりすることを自殺念慮と名づけられている。自殺が行われる場合には、自殺をしたいという準備状態が形成され、それに直接動機が加わって決行されるのだといわれる(準備状態を自殺傾向と訳されている場合もある)。自殺の準備状態が強い場合には直接動機が小さなものであつても自殺は決行されるといわれている。準備状態の中には性格的なものも含まれ、自殺念慮の強さにも関係するとされている。もちろん、この場合における自殺の経過、経路にも、それぞれの個人差のあることは確かである。

五

自殺の手段と方法については自殺の原因・動機と共に重要な部分を占める。それだけに割に多くの発表がなされている感がある。

山田和夫氏は「青年の自殺特徴の変化」(昭和六十一年)の論題のもとに、シュナイドマンや大原健士郎の自殺の類型化に対する定説を掲げ、最近の青少年自殺の実態を披瀝してい

る。

シュナイドマンや、わが国では大原などの秀れた研究から自殺には類型化された定説がある。シュナイドマンは自殺を①死にたい心性からのもの、②殺したい、③殺されたい心性タイプの三種類に分けた。

①のタイプ 死にたい自殺は老人に多い。もう長生きしてもこの世に面白いことは何も無い。……早く人生を終わりたい、という潜在願望があつて死について心の準備が出来上がっている。だから自殺手段は必死、必殺の方法をとり、例えば睡眠薬をのんだ上にガス栓をひねる。あるいは首吊、飛降りなど激しい手段を選ぶので既遂率が高い。覚悟の自殺が多く、遺書を残すことも少なく、予告徴候もない。これが老人の自殺の典型とされている。

これに対して青年の自殺は、②③の殺したい殺されたいタイプであつて、誰かに対するさういった激情や攻撃、葛藤状況の中で企図するため、迷いが多く、まず自殺予告や遺書が多い。つまり、救いを暗に求める心性がある。したがって自殺手段も服薬などが多く、既遂率が低い。これが定説であり老人と対照的とされてきた。……筆者の研究ではこの十五年間、青年に関する限りこの定説はほとんど通用しなくなってきた。まず自殺予告は少なくなり、ふっと自殺行為に走る群が目立ってきた。遺書を残すものは三分の一以下になった。既遂未遂率は検討できなかったが、自殺手段は従来、青年に多かった服薬は激減し、代わりに飛降り、電車への飛び込みが最も多くなり、また電線を捲きつけタイマーで死ぬなど、激しいものが増えた。要するにかつての老人の類型と形式の上では全く同じになつてしまつた。だが内容的には明らかに区別

される。老人のように、死を覚悟し準備するからさうなつたのではない。青年の死の心性は従来どおり、②③のタイプであるのに、行動化の歯止めがなくなつたため、ふと短絡的に自殺する青年が増えたためである。ちなみに少年の自殺は元来、感情が激しく揺れ、歯止めなく唐突に縊死したり、まさに短絡的に死に至るために、形の上では遺書もなく激しい手段をとるなど老人に似ていた。青年の攻撃的な行動化が増え、少年と同じように、自殺もまた、少年化してきたといえるかも知れない。

上里一郎・大河内浩人⁽²⁴⁾の両氏は「子供の自殺」(昭和六十一年)の論題のもとに、衝動的に行われ易い子供の自殺手段にふれられ、子供の生死観の大人と異なる所以を指摘されている。

子供たちの間には、致死率の高い自殺の手段がとられる。として……自殺の手段は飛び降りや圧倒的に多く、全体の三二・八%を占め、ついで首つり、電車などへのとびこみの順となつている。手段には性差があり、男子では首つりが、女子では飛び降りやガスが圧倒的である。子供は他の方法を知らなかったり、周到に準備せず、衝動的に死を選んだりするために手近で周知の方法がとられる。これが結果的には致死率の高い手段と一致するわけである。……子供たちはテレビや雑誌などを通していやというほど「死」や「殺人」を見聞して、知識はもっている。しかし、核家族化や親族や近隣との関係が稀薄になつているために、「死」を具体的に体験する機会が乏しくなつている。加えて、動物などを飼育してその誕生とか死に出会うことも少ない。

したがって、虚象としての「死」はともかく、実体としての死を知らない子供がふえている。死んでもまた生き返ってくるとか、生まる変わるものと考えたりしている。そのため、現実の苦しきや醜さから逃避する手段として自殺を考えがちである。中学生になっても、ロマンチックな夢を託したり、死後の世界を美化してあこがれることが少なくない。

越永重四郎・島村忠義両氏は、⁽²⁵⁾「大都市における青少年の自殺に関する調査報告をまとめ」(昭和五十四年)の論題のもとに、男性に比して女性の社会進出化が旺盛になるに従って、自殺手段にまでも男性の消極的・内向的態度に対し、女性の積極的に変化したことを述べられている。

……男性のひ弱さと自殺の特質……男性の女性化が叫ばれてから久しいが、一般的には平和な社会が存続すればするほど、そして今日のような企業や政治組織の巨大化が進行すると、男性は相対的に目立たなくなり、激しい競争心や野心といった男が本来持っていたと思われる属性は時代遅れになり、若い世代はより安定した生活を志向するようになる。男性の服装が女性化し、女性の服装が男性化するのはいさした社会的状況の反映によるものであるといわれている。大都市の青少年の自殺を分析してみると、こうした社会現象の類似点を見いだすことができる。例えば、

自殺手段や遺書の内容、場所等の中からこれらの特徴を述べると明らかに時代の変化を感じさせる。まず、自殺手段についてみると、これまで女性的自殺手段として分類されてきたガスや入水等の消極的な自殺手段が減少傾向を示し、男性的自殺手段の分類

として取り扱われてきた刃器、飛び降り、縊首などの積極的な自殺手段が女性に多くなってきたことが挙げられる。大都市青少年の自殺手段と比較して全国レベルでは男性的自殺手段と女性的自殺手段の間には明確な差異が見られる。青少年の自殺の発生場所は全体的に居室の割合が多く、性別からみると、男性は室内型で女性はビルなどの室外型が多くなっている。こうした傾向から一概に、男性の脆弱化であることを断定するつもりはないが、いずれにしてもこれまでの青少年自殺等の研究を総合的に分析してみると、男性が消極的(内向的)になり、女性が積極的(外向的)になりつつあることは事実であろう。

稲村博氏は⁽²⁶⁾「自殺の疫学」(昭和五十九年)と題し、アメリカと日本の若者の自殺観の異なる立場を指摘されながら、最近の日本における少年たちの自殺の現象と手段の特徴を紹介されている。

自殺の手段は、国や地域により、また時代によって非常に異なる。これには民族の特性や歴史がよく反映するほか、どんな手段が得られやすいかに相違があるためで、概していえば手近にある簡単な手段が選ばれやすい。しかし年齢差や男女差も大きく、老年期と少年期は縊首や飛び込みなど致死度の高いものが、青年期では薬物など致死度の低いものが多い。また男性の方が女性よりも激しい手段を選びやすい。総人数では縊絞首が最も多くて半数程度を占め、続いて薬毒物、入水、ガスなどとなる。少年期と老年期で縊絞首の率はとくに高く、青年期はそれがやや低くなる代りにガスと薬毒物がふえている。ほかには、入水が加齢とともに

ふえていることと、飛び降りや轢死は若年ほど多いことが特徴としてあげられる。……概していえば、入水、ガス、切刺には大きな男女差があり、それに年齢差が微妙にからんでいる。たとえば縊絞首についていえば、若年ほど男性が多いのに対して加齢とともに女性がふえ、老年では差が小さい。ところが飛び降りなどは逆で、やはり若年ほど多い点は似ているのだが、少年期にはずっと女性が多いのに、青年期から逆転して男性が多くなり、それがずっと続いている。

大原健士郎氏⁽²⁷⁾は、不安と病理、「高校生の自殺」(昭和五三年)において、青年と老人の自殺をとりあげられ、その心理の奥底の突明に努力されている。

睡眠薬服用などに比べて、飛び降り自殺は比較的衝動的な自殺と考えられがちである。しかし、彼の行動を通してみても、何とかして助けてもらえまいかという願望をうかがい知ることができるのである。この傾向は老人の自殺よりも青年のそれに多い。老人の自殺は死に直行する傾向があり、自殺手段も一般に縊首や溺没など、致命的な手段を選びがちで、「諦めの自殺」といわれる。これに対して、青年の自殺者は、アスピールの傾向が強く、一般に手段は服薬など未遂率が高いものを選びがちで、遺書を残す者の割合も多く、「求める自殺」といわれ、「助けられたい」というこの願望は、自殺の予告徴候として出現する。

以上、自殺の方法・手段に関する記事を掲げてみた。自殺の方法・手段に対する見解は必ずしも一致しないようであるが、これがむしろ正解であるのかも知れない。ここではおお

むね年代順に記事を紹介したが、自殺に対する心理的な見方、法則が存在するとはいえず、自殺には年代的に見た考え方や流儀があり、その立場が互に影響を受け左右されるのは当然なることであろう。

六

自殺をなくすためには、地域社会、学校、友人、とくに家族の人たちが中心になって尽力しなければならない。少年は人生歴も少なく、外部の影響にも敏感であり、未成熟によるもろさもあること故、とくに周囲の人たちがやさしくいたわってやる事が大切である。彼等の一歩恐れる悩みは、周囲から無視される事と、それに伴なうところの孤独感である。かような観点から考えた場合、親の過保護や期待過剰の習慣は忍耐力の低下と欲求不満に耐える力を失い、落伍する少年たちを生ぜしめ、少年の自殺の原因に大きな関係を持つに至った。両親の不在、虐待は少年たちを孤立にさせる原因となる。不在とは、両親が家庭より離れるということではなく、子供を無視するという精神的な立場も、この範疇の中に入るものと考えられる。子供たちの悩みの中で淋しさというものは大きな役割を持っているが、斯かる立場の中で誰かと交流を持ち、自分を受け入れてくれるような人の存在を常に求めている。ここに悩みの相談の重要性が叫ばれる所以となる。高校

生を中心とした彼等の悩みの相談相手は多くの場合、その大半が友達に集中する。教師や親に相談する者はほんのわずかであり、友人の価値の大きさに一考する必要がある。中学生⁽²⁸⁾の間においても教師や親に対する不信の念は意外に強く、高校生の場合以上に友人との交流場面を高く望んでいる。学校における重要な予防対策としては、先ず、友人や教師との間にスムーズに溶け込んで行く事の出来得るような人間関係、信頼関係を樹立し、互の人間的理解を深めて行く事が必要であろう。このような意味からして教師の存在は、自殺の予防・発見のための第一人者でありその役割には実に大きなものがあると考えられる。

自殺は人間にのみ見られるところの行為であり、他の動物⁽²⁹⁾にはあり得ないものである。自殺は人類の歴史と共に誠⁽³⁰⁾に古い存在と思われるが自殺防止の活動は新しい時代のものである。内容的にはボランティア活動によるものが歴史的にも古く、また、その多数を占めていたと言われている。記録的には一八九三年頃、東ヨーロッパに「レンベルグ有志者救済協会」が、ボランティアの奉仕によって誕生したのがはじめとされ、その中には救世軍やカソリック教団の如きキリスト教系の団体によって多くの活躍がなされていた。

その後一九六八年に世界保健機関が自殺予防に乗り出す事によって、世界的な広がりやなすに至った。設立機関の背景

には公的なものと私的なものとが設立されたのは当然であるが、その多くが精神医学の専門家によって、大学病院等を中心に臨床的な立場で開設せられたのがその特色である。もちろん、この種の活動機関が相互に連携し、カウンセラー活動や電話による活動で行われ、直接・間接のもとに奉仕せられたのであった。わが国⁽³¹⁾における自殺予防活動は一九七一年に、電話相談員のボランティアを中心に、医師・弁護士・心理・教育・福祉関係等の専門家を交えて行われるようになったのであるが、最近では、警察関係・役所・宗教界等、公私の施設にわたって更に広く実施されるようになった。とくに「いのちの電話」を利用する青少年とその親たちの相談活動は意外な発展を遂げた。

東京都豊島区⁽³²⁾立高松小学校の性教育研究推進委員会で実施している「生命誕生」という五年生の授業の中で「命^{いのち}という言葉から何を思いうかべますか」というアンケートに対し、左記の如き解答を多数得ることが出来たと解答例が報告されている。つまり、

- 世界に一つしかなくてお金では買えないもの。
- 人間だけでなく、動物や植物や虫にも命はあるのだから、いじめたり、殺したりしてはかわいそう。
- 大切にしなければならぬ。そまつにはいけない。
- だれでもいつかは死んじゃうけど、死んじゃうまで、せい

ばい大切にしないではいけない。

○その他、死の原因を書いたもの、寿命に関することを書いたもの等がある。

五年生を対象としたアンケートだが、ほとんどの児童が、命は大切なものとしてとらえているという。これらの年齢でも、かようなしつかりとした情緒性の芽生えている事が知られるが、これが宗教心の芽生えの基礎として栄え、道德律の推進力として確力してゆくのである。「いのち」や「もの」を大切にしない、という生活態度をどのように治し、よりよい方向にどう導いて行くか。宗教家としての迷える子供たちに対する重要な課題の一つである。現代社会の暗い出来事の根本問題を探る時、理性に対する不信や人間そのものに対する不信がある。われわれは宗教的な立場に立って青少年に対し、物事に当り動ぜぬところの信念を養い、生きる目標を与えることが大切である。して、どんな環境のもとにあっても、種々なる悩みや欲求不満を社会規範に適応出来るようにしつけることが大切である。物質的、享乐的、利那的な傾向に走る青少年の多き時代、社会全般的に宗教が軽視され、宗教的気風が失われている時代に、ともすると自殺現象が蔓延するものである。自殺は、内向的・非社会性の地盤に発生しやすいといわれているが、登校拒否・家庭内暴力・いじめの問題なども、自殺と大いに共通したところがあると察せられ

る。この根底には宗教的確信の弱体と、互に人を信頼することの出来ない心情の無力さより発するものと考えられる。

親が子供を信じ、子供が親を信頼するところには、家庭内暴力もなければ自殺もあり得ない。教師が生徒を信じ、生徒が教師を信頼するところに、校内暴力もなければ自殺もない。級友同士がお互に信頼し合えば、そこにおのずと和が生じ、いじめもなければ、自殺なども存在しない。自分で自分をいじめるのが自殺である。自殺する人たちの多くは、自分の自殺をすることが、周囲の人たちに大きな迷惑をかけるということに気付いていない。仏教では当然自殺の行為に対しては否定的な立場をとっているところであるが、われわれは、仏教をもって体得したところの人格を以って、以心伝心・感応道交のもと、人命の一瞬一刻が無限の価値あるものであることを確信すべきである。

参考・引用文献

- (1) 詫摩武俊「青少年問題」第二十四卷十一号中 昭和五十二年十一月 青少年問題研究会発行 七頁
- (2) 松原達哉「教育心理」第二十六卷三号中 昭和五十三年二月 日本文化科学社発行 七頁
- (3) 宮本忠雄「自殺学」大原健士郎編集 昭和四十九年十一月 至文堂発行 四十五頁
- (4) 詫摩武俊「青少年問題」第二十四卷十一号中 前同 七頁

- (5) 園原太郎「自殺の心理」昭和二十七年七月 創芸社発行
四十六頁
- (6) 園原太郎「自殺の心理」昭和二十七年七月 前同 八十頁
- (7) 馬場謙一「教育と医学」第三十四卷五号中 昭和六十一年
五月 慶応通信発行 八十頁
- (8) 平井信義「教育と医学」第三十二卷十一号中 昭和五十九
年十一月 前同 十九頁
- 詫摩武俊「青少年問題」前同 八頁
- (9) 遠藤辰雄「教育心理」第二十八卷十号中 昭和五十五年九
月 前同 七十九頁
- (10) 松原達哉「教育心理」第二十六卷第三号中 前同 一六九頁
- 勝俣暎史「教育心理」第二十六卷第三号中 前同 一八七頁
- (11) 松原達哉「教育心理」 前同 一六八頁
- (12) 越永重四郎・島村忠義「青少年問題」第二十六卷十一号
前同 一四頁
- (13) 勝俣暎史「教育心理」第三十一卷三号中 前同 一四九頁
- (14) 更井啓介「教育と医学」第三十二卷十一号 前同 五二頁
- (15) 大原健士郎「不安と病理」松原・岡堂編集 昭和五十三年
二月 至文堂発行 四七頁
- (16) 更井啓介「教育と医学」第三十二卷十一号 前同 五一頁
- (17) 稲村博「教育心理」第二十六卷三号中 前同 一八四頁
- (18) 坂本忠義「岩波講座 子どもの発達と教育Ⅰ」一九七九年
岩波書店発行 一一一頁
- (19) 越永重四郎・島村忠義「青少年問題」第二十六卷十一号中
前同 十頁
- (20) 園田太郎「自殺の心理」昭和二十七年七月 前同 七十頁
- (21) 詫摩武俊「青少年問題」第二十四卷十一号中 前同 十一
頁
- (22) 大原健士郎「不安と病理」前同 四十五頁
- (23) 山田和夫「危機」思春期の病い 昭和六十一年十一月 金
子書房発行 一三三頁
- (24) 上里一郎・大河内浩人「教育と医学」第三十四卷五号 昭
和六十一年五月 慶応通信発行 四十四頁
- (25) 島村忠義・越永重四郎「青少年問題」第二十六卷十一号
前同 十二頁
- (26) 稲村博「教育と医学」第三十二卷十一号 前同 十頁
- (27) 大原健士郎「不安と病理」前同 四十頁
- (28) 大河内浩人・上里一郎「教育と医学」第三十四卷五号 前
同 四十七頁
- (29) 日高敏隆「教育と医学」第三十二卷十一号 昭和五十九年
十一月 前同 六十五頁
- (30) 稲村博「青少年問題」第二十六卷六号中 昭和五十六年六
月 前同 六頁
- (31) 斎藤友紀雄「青少年問題」第二十六卷六号 前同 十四頁
- (32) 性教育研究推進委員会実践報告「児童心理」昭和六十一年
十二月 金子書房発行 一九五頁